

文Ⅱ

福島農業復興のために自分でできることは、第一には現場に行くことだと思う。何事も実情を自身の五官で感じ取ることが重要であるが、特に今回の放射能汚染については、科学的正確さに欠けていたり感情的になりすぎている情報が溢れているため、自らが現地に赴くことが非常に重要に思える。

またそこで得た知見を自己完結させず、周囲に広めていくことも重要だ。福島に対する正しい認識を多くの人々が持てば、新たな対応策が見えてくるかもしれない。

正しい知見を得るまでは、本当に必要な支援というのは見えてこないかもしれない。しかし、経済的な支援はどうあっても有効であろう。そうである以上、福島産の農作物を購入したり、寄付を行ったりすることは、自分でできる支援の最も具体的な例といえる。

文Ⅲ

課題：今日の講義と配布資料をもとにして、自分にできることを述べよ。

まずは行動面について。今の時点で今の私にできると思えることは2つある。1つ目は、情報を共有することである。これは、講義で触れられていた「科学コミュニケーションの必要性」から思ったことである。まずは自分の家族や友人と、福島や放射能を話題にし、情報を共有することが、根拠のない危険性・根拠のない安全性をむやみに信じないための手立てとなると思う。私は今まで「放射性セシウムは表土にとどまりやすい」と聞いてもあまり納得がいていなかった。しかし、今回の講義で放射性セシウムと粘土の話を知り、ようやく納得することができた。今回の私のように、詳しい説明を聞き頭で理解することで心の面にも変化があらわれる人はたくさんいると思う。よって、今回、そして今までの一連の講義で得た知識は今後情報の共有という場面で生かしていきたい。

今の私にできると思えることの2つ目は、現場を知ることである。どこかで大変な思いをしている人いる、と知っていてもどこか物語のような気がしてしまうのは、現場の「人」を知らないからだと思う。「被災者」という言葉で片付けてしまうと、その1人1人の人間には意識が向きにくい。しかし、その1人1人は確かに生きた人間であって、自分と同じように家族がいて、今まで積み重ねてきた人生があって、失ってきたものがある1人の人間である。そのことを意識して、物語ではなく現実として現実を感じるためには、現地の人・声・空気を知ることが大切なのだと思う。

次に、今後の私が行動面でできると思うことについて。私は文科系の学部に進むつもりで、科学的な手法や技術の開発に直接的に関わっていくことはあまりないと思う。しかし、人間の意識の面には深く関わっていくことになると思うので、その方面で模索してみたいと思う。例えば、情報の取捨選択について。人は何故適切と思われる根拠が示されていないか、示されている根拠の実態が自分ではよくわかっていなかったりするときでさえも、一部の情報源を完全に信じ切ってしまうのか。何故そのような人間が形成されるのか。といった問いの答えを追求し、解決策を模索することは、福島のために私にも取り組めることの1つであると思う。科学的な手法や技術よりも即効性がない分野のようにも感じられるが、今後の人間の進歩のためには決して無駄ではないと信じている。

最後に。自分自身がどのような行動をとるにせよ、真摯に向き合う姿勢を大切にしたいと思った。

課題

資料を読んで、自分にできることは何か考えよ。

回答

福島農地の除染や農作物への放射性セシウムの低減対策について、多くを学んできた。今回の講義では、「ゼネコンや大型機械に頼らず、農家自身でできる除染」という新たな視点から放射線動態学を学ぶことができた。地表表面近くに定着する放射性セシウムを取り除くためにとられる表土削り取り法により、汚染された廃土の行き先が問題となっている。廃土の集積場は、近隣住民の不安を取り除くため、「仮置き場」という呼び名がつけられている。このような状況を、農家自身で行う除染により、回避することができることを今回の講義で学んだ。

さらに、農家ではない自分ができることはあるだろうか。例えば今回のように、東京大学の学生という立場を生かして、専門家の説明や意見を生で聴くことができる。いま、科学技術が問われている、という溝口先生の提示に対して、私は、未来の科学に携わる者として、素人でも専門家でもない今の学生の時代にできることは、現地へ行って様々な体験をすること、多くの時間を費やして考えることの二点だと思う。教わること、疑問を抱くこと、質問すること、これらが不便なく出来るのは学生の身分だけだと思う。

セシウムが土に吸着することについて、以前、電氣的性質のため、と説明を受けたがよく理解できていなかった。今回、放射性セシウムは粘土表面の穴にはまっている、という説明を受けて疑問が解決した。また、除染法を考える際に、放射性セシウムを粘土粒子と一体化して考えるというのは衝撃を受けた。雨によって流される、斜面の下の方に溜まりやすいというのは、粘土粒子あつての性質だったということか。

環境省と農水省がうまく連携をとれないため起こる不備という話も勉強になった。実際に私は、農学部の先生の講義を受けるとき、ある実験結果の根拠について、化学的なことなので分からないと仰っていたことを思い出した。放射能に向き合う時、自分の専門分野でのアプローチはもちろん、数理科学的な目線、農学実学的な目線、どちらも理解することが重要だと思った。

実際に、農家自身でできる農地除染法の開発について、冬に凍った板状の土をはぎ取るというのは、まさに地域に適したアイデアだと思った。都市と地方による認識の違いという問題点も先生は仰られていたが、この場合は都市と地方の連携強化というより、地方への理解がある人が都市で活動したり、都市で働く人が積極的に地方へも赴くというのが重要だと思った。自分自身の中で経験を積むことで、伝言による意味の取違いを起こさず、さらに深い考察が望めると思った。

理Ⅱ

【課題】講義及び配布資料を元に、自分でできることを考えよ。

溝口教授は、研究者としての立場からの飯舘村の除染についてお話していた。自分にできること、ということなので、いま学生である私は、「学生」としてできることを考えることにしたい。

学生としてできること、としてまず一番にあげられるのは溝口教授もおっしゃっていた「現場を見ること」であると思う。一ヶ月程前に「ふくしま再生の会」が行った村民との対話というものに参加した。原発事故以来、私をはじめに参加したといってもよい復興に関わるイベントだった。つまり、いまの私にはボランティアなどを含めて現地に行ったことがないのである。その点で私にはまだできることが残っていると思える。

現場を見た上で次に私ができることを考えてみる。実際にまだ行ったわけではないので、想像ではあるが。溝口教授は農水省の提唱する汚染レベルごとの 3 つの除染方法では現場の現状に即さない不適切な場合があり、今回の例では飯舘村の状況に合わせた対処が必要であるとおっしゃった。すなわち「までい耕法」や凍土として剥ぎ取る技術が考えられる。これからは現場にあった除染方法の開発を意味する。現場を知ることが大事なことだが、学生である私には現場を見たところで、その先に進む、すなわち最先端の除染技術について考えるのはまだまだ難しい。

そこで、科学コミュニケーションというキーワードがここで登場すると私は思う。私は以前からこの講義のレポートで、科学の現状がきちんと国民に伝わっていないことに触れた。例えばセシウムは土壤に吸着するので、地下水への影響は少ない、と言うだけでは、人々には水が土壤中の“成分”を吸収するのではないかという思い込みが先行し、事実と相違する。しかし、実際に演示すれば、納得もでき、作業も進みやすくなるのではないか。何より専門家が現地の実情に合わせて考え、研究を重ねた結果であるから、嘘をついていない限り、いま取りうる最善の方法なのだから。

このように、人々には放射性物質の動態などについてきちんと知ってもらう必要があると思う。この講義を聞く前々から思っていたことである。だから、研究のできない私たち学生ができることは、まず被害にあった村の人や放射性物質を必要以上に恐れる人たちに、“事実”を伝えることではないだろうか。専門家が直接言ったほうが説得力もあるかもしれないが、専門家ばかりに頼っていては対応が遅れ、いつ手遅れになってしまうか分からない。

もちろん私は専門家でもなければ村の人々でもないから、より不十分なところは多いと思う。しかし、不十分ながらも村民の方々と対話を続けていけば、彼らの気持ちを考えた上で、単なる技術の押し付けにはならなくなるとも思う。何よりよくないのは、わかってくれないからと問題を放置して、そのままにし、目を背けることではないだろうか。

文 I

レポートテーマ:自分に出来ること

最終回であった今回の授業は、文科生にとっても理解しやすく、私は特に、化学コミュニケーションの話が印象深かった。授業中に出た具体例で、農家自身でできる除染法である「までい工法」の中で、溝口教授らが泥水を流した話があった。専門家である溝口教授らは浸透濾過現象を常識的に理解していたが、そうではない地域住民から抗議があったという話であったが、その抗議を受けて溝口教授が、専門知識のない一般人が少しでも理解できるように、と YouTube で簡単な実験映像とその解説を公開したと聞いて、今私たちに不足しているのは、まさにこの歩み寄りだったのだなと思った。専門家は専門知識をかみ砕いて説明し、一般人は理解しようと努力する。こうしてお互い努力して歩み寄り、高めあっていくことが様々な問題(今回は福島の農地汚染)への解決につながるのではないだろうか。

ところで、努力して歩み寄る必要があるのは専門家と一般人だけではない。東日本大震災から 3 年以上が経ったいま、福島をはじめとする東北が完全に復興するには、被災者とそうでない人たちとの歩み寄りが必要なのではないだろうか。もう最近のニュースでも震災について扱ったものはほとんど報道されなくなり、震災の当事者でない人々は、言われなければ震災のことを意識することは滅多にないだろう。忙しく日常を過ごすなかで、東北の人が今どのような生活をしているのか考えることはほとんどなく、3 年経っても復興が進んでいないということさえ認識していないかもしれない。私たちのような被災者ではない人間が被災者の声に耳を傾け、必要としていることを提供していく、ということがこれからも当たり前が続いていかなければ、完全復興はまだまだ先になってしまうかもしれない。さて、以前もレポートに書いたかもしれないが、私がお世話になった日本史の先生が東日本大震災について次のように言っていた。「君たちが大学に通う 4 年間は福島の復興の 4 年間と重なっている。そのときの君たちはまだ無力な学生でしかないが、では何ができるのか。それは福島を、そして東北を忘れないことだ。」今回のレポートのテーマがまさに「自分に出来ること」だったのでその先生の話思い出したのだが、まず私に出来ることは、震災があったこと、原発事故があったこと、そしてまだその影響でつらく苦しい生活を強いられている人がたくさんいること、これらを忘れないことだと思う。

しかし、4 月から約 3 か月半の間、福島について学んできたのだからもう少し出来ることがあるように思う。最終回の授業でも扱われていたが、マスコミについてである。正しいことを正しく伝えるべき立場のマスコミが、自らの利害のために情報を操作している現状下で私に出来ることは、誤った情報に惑わされて農作物などの風評被害を煽るようなことをしないように、情報の取捨選択をし、自分で判断して行動することである。そのためには、これまでの授業で学んできたことを軸に、専門的とまではいかなくとも、ある程度までは

知識を得るよう努力していく必要があると思う。

また、授業では田や畑、森林や海川といったさまざまな自然における放射性セシウム汚染の現状とその除去作業の様子を見てきたが、私はおそらく今後もこれまでのように直接放射能の除染に携わることは出来ないだろう。しかし、少しの努力で小さな支援ならすることが出来る。例えば、高校で募金を送る際、大きな団体にお金を送っても用途が不明瞭になってしまうという理由で、小規模なボランティア団体を通じて募金をすることで、確実にお金が有効に活用されるようにしたことなどである。正直、お金を送るだけの募金が果たして支援として有効なのかと疑問に思うこともあるが、自分が出来る範囲で、少し努力と工夫をして支援を継続することも、自分に出来ること、かつ重要なことだと思う。

私個人が出来ること、は挙げてみると本当に些細なことばかりだったが、この些細なことにも幾分努力が必要であり、またより多くの人々が自分に出来ることを実行していけば、現状はかなり改善されるのではないかと楽観的にも思っている。

文 I

私はこの農業環境と食の安全を対象とした放射性物質動態学の授業を受けてきて、福島原発事故後に注目された放射性物質について多くの知識を得ることができた。特に福島県の現状を現地で働かれていた方から聞くことができ、福島県において実際に行われている対策を知ることができたのは非常に貴重な経験だった。

今回の講義の中で非常に興味深かったのは福島県の気候を利用した除染方法である。放射性セシウムは多くが土壌の粘土層の孔にとらえられて、放射性セシウム自体は土壌の表明約 5cm 以内に留まる。また、福島県では冬に寒さで土壌が凍る。そのため、表土剥ぎ取り法では取りこぼしのリスクがあったが、冬に凍土を板状にまるごと剥がすことでそのリスクを回避できるのだ。最新技術を利用する訳ではなく、自然を活用したこの除染方法は「農業」という自然を相手にする営みにふさわしい方法なのではないかと感じた。

福島の原発事故後の取り組みは非常に多岐にわたっている。その中でも行政や公共機関による支援が大きな役割を担うのが当然であるが、実際には住民からの直接の意見を聞き入れづらい状況にある行政や公共機関には限界がある。そこで NPO の存在が大切になる。NPO の、より地域に密着して、できることから動くという姿勢が住民の理解にもつながるだろう。

今回の講義の冒頭で溝口先生が『天空の城ラピュタ』の中の「どんなに恐ろしい武器を持っても たくさんのかわいそうなロボットを操っても 土から離れては生きられないのよ」という台詞を紹介されていたが、本当にその通りだと感じた。たとえこれからどんなに科学技術が発達して、新しいものが生み出されたとしても、私たち人間は、生きていく限り、衣食住のどこかの場面で必ず農業、ひいては自然と関わらなければならない。今回の原発事故はそのことを私たちに思い出させるきっかけになったのではないか。

大学生という立場にある私が今すぐにできることはそこまで大きくはないかもしれない。しかし、この一連の講義によって多くの知識を身につけたからこそ実際に福島県に行き、現状を自分の目で確認することの意味は大きい。現地に行くことが現地との認識の差や都市と地方の認識の差を埋めることにもつながるはずだ。また、近い将来に日本を背負う世代になる学生たちが自分の目で福島を確かめることは非常に重要である。私はそんな学生が増えるように自分の知識や自分で見たことを伝えていけたらと考えている。

文Ⅱ

今回の講義で強く印象に残った話は科学コミュニケーションと現場を見ることの重要性である。

私は福島県出身で震災と原子力発電所事故が起きた当時も福島県で暮らしていた。私の住んでいた地域の放射能汚染による被害は原発周辺地域や飯館村のような避難地域、避難準備区域ほど重大なものではなかったが、やはり、放射能による被害や生活への影響は感じていた。事故から三年が経ち福島を離れた現在ではあるが放射能に対する意識は薄れているとは思われず、逆に放射能とは無縁に近い東京に住んでいることで自分の意識や生活習慣に放射能が奥深く浸透していると度々感じさせられる。

講義の中でいくつかの農地の除染方法が紹介された。その中の一つである「までい工法」は田車で泥水を掻き出し、事前に掘っておいた穴へ流し込み、汚染されていない土を上にかぶせるものである。までい工法は費用が掛からず、効果も十分にあることは明らかであるが、この方法を危険だとする苦情があったと聞いた。私はこの苦情について正しくないものと認識しつつも、ある程度の共感を覚える。それは放射能をまだ感覚的にとらえ、その性質をきちんと理解できていないからだと思う。（もちろん私はこの一連の講義で放射能についての理解は進んだ。）それは県民や国民でも同じであろう。放射能を何か危険な物質といった漠然としたものとして多くの人々が捉えているのではない。事故から三年が経ち、人々の間ではこのような感覚が染み付いてしまっているかもしれない。

しかし、福島県の放射能汚染問題は今後も長く続いていくと予想されるため、放射能についての正確な知識を一刻も早く住民に身に着けさせ、曖昧な放射能についての感覚を改革しなければならない。だがこの時、単に放射能についての知識を並べるのではなく、なぜそうなるのかという理由を付け加えることでより一層、効率よく、正確に知識を広めることができると考える。たとえば、私は一連の講義で放射性セシウムには粘土粒子に吸着する性質があると学習してきたがなぜそうなるのかは理解していなかった。しかし今回の講義でそれは粘土の化学構造にセシウムがトラップされるからだとなり、非常に納得がいった。

したがって自分にできることといたら放射能や除染についての成果な知識を身に着け、更にそれをほかの人々に正確に伝えることである。現在は学生であり、どちらかといえば情報を発信するよりも受信することが断然多いが、東京大学に関係するものとしては情報を発信することも求められるため、更に学習を進め、断片的な知識だけでなくその理由も答えられるようになる。

文Ⅲ

自分にできることは何か

溝口先生の話聞いていて、正しい放射性物質についての知識や除染方法について、日本の一般の人や海外の人に正しく伝えるというのはとても難しそうだった。私にできることは、いくつか思いついたが、一番身近なところから行くと家族や友達に正しいことを教えることである。しかしそのような相手に真面目に勉強、！というのも恥ずかしいものがあるので、会話の中で少し放射能汚染の話が出たときとか、SNS 上で間違った情報が流れてきたときに訂正するとか、そういうところから少しずつしていくことも大切だともう。そしてその教えた家族や友人が、そのまた家族や友人と少しずつ情報を共有してくれるのではないかと思う。ネット上では放射能汚染に対し両極端な意見が多いが、どちらにせよそれを馬鹿にするように批判して終えるのではなく、正しい訂正をしたいと思う。

次に、大学内で放射線問題について考える勉強会を開くことである。放射性物質についての基本知識から現在の除染に関する問題まで学び、問題については議論することができる。そのメンバーで週末や長期休暇中にボランティア活動を行ったり、他の NPO 法人に協力したりすることもできると思う。また、駒場祭や五月祭で一般人向けの展示ができると思う。放射能汚染について気になっている人は多いと思うので、ある程度の人に来てくれるのではないかと思う。学生に対しても見てもらって、こういう問題にまず興味関心を抱いてもらうことも狙える。

また、長期機関の間に制限区域などを訪れ、自分の目で福島の実状を知ること自体が私にできることのひとつであると思う。現状を見て、見たことを何かの形で身近な人に発表し、その人たちにも関心を抱いてもらうこと。写真を撮ることが好きなので、写真も撮って見せることもできる。

また、自分ではできないかもしれないが一つの案を出すことも私にできることだと思うので、思いついたことを次に書いていく。

壮大な案としては、まず何か似たような復興支援などの活動をしている NPO 法人に入るか NPO 法人を立ち上げるかして、地域の公民館一軒一軒で放射性物質の性質や汚染状況、先生のおっしゃっていた農家が自力でできる除染方法などについてレクチャーする勉強会を開くことができるのではないかと思った。まず原発の近くの地域から初めて、気の遠くなるような話だが日本全国へと広げていく。全国へ広げるには、まず誰でもその勉強会が開けるようなマニュアルを作り、各都道府県で大きく勉強会開催のための講習会を開く。参加者は日本各地の復興支援団体や教育機関関係者、大学教授、学生などを募る。講習会後は開催までメールや電話でサポートを行う。こうすることで全国の一般の人に問題に対し関心を抱いてもらうきっかけにもなるのではないかと思う。

また、海外の人への広報がうまくいっていないという話もあったので、外国語大学の学生や専門言語を持つ大学教授や翻訳家の方に協力を仰ぎ、放射能汚染に関する情報などを多言語で見ることができるポータルサイトが作ればいいのではないかと思う。関連動画へのリンクも貼ったり、見た人がこのサイトだけで基本知識と現在の状況について知り、誤解を減らせるようなサイトである。また SNS などでもこのようなサイトがあるという広報活動もすべきだし、これ自体は簡単にできるのではないかと思った。

理Ⅲ

福島県の農業の復興のために自分ができることは、具体的にはあまり多くはないと思う。実際に汚染された地域に行って大型の機械を用いて土壌を削るなどして除染を進める手伝いをしたところで、1 学生が挙げられる効果は限られている。物理的に福島県の汚染を減らし、放射線量を下げることが難しいとしたら、自分にできることで思いつくのは、正しい知識を持って、放射線恐れ、時には誤った知識を持つ一般の人々にそれを広めていくことくらいである。事故から既に三年以上が経ち、徐々に事故は風化していっていると言われるが、実際そうであるとは思えない。今でも原発再稼働の問題は頻繁に報道され、原子力発電所周辺の住民の多くを中心として国民の大部分は原発再稼働に反対しているのが現状だ。つまり、放射線による汚染に対する恐怖はまだまだ日本国民の心に根強く残ったままだ。これは決して悪いことではないと思う。放射線は確かに有害なもので、それらを恐れないというのは危険なことだからだ。ただ、放射線をただ恐れているだけで、正しい知識を持ち合わせていないという場合がまだ多々あると思う。具体的に言えば、除染が進み、放射線量が十分に低くなった農地でとれ、国の基準も満たしている福島県産の食物を福島県産だからという理由だけでなんとなく避けてしまうというケースなどだ。こうした心理によって福島県産の食物が売れなければ、福島県の農業復興に大きな歯止めがかかってしまうのは明らかだ。そこで、なるべく多くの人に正しい知識を身に付けてもらい、風評被害を避ける必要がある。そのためには、簡潔にかつ説得力がある説明を考え無くてはならないが、それを考えてなんらかの方法で発信していくことくらいは自分にもできると思う。単なる不評被害の話にとどまらず、放射線によって汚染された土壌を地下深くに埋めても他の農地に流れ込む地下水が汚染されることはありえないという話についても同じだ。なるべく、分かりやすい説明の方法を考えつく努力をしていきたいと思う。また、他人に説明するだけでなく積極的に福島県産の農作物を自分で買うということもできると思う。こちらは、他人に説明するよりも効果は大きくないようには感じるが、こうした個々人の行動や心がけが全体に波及すれば、福島県の農業復興に大きな影響が出ることは言うまでもない。さらに、一介の学生に思いつくとは思えないが、もし除染のいいアイデアなどが思いついたら、誰かに言ってみたいと思う。とにかく、まとめると福島県の事故について考え続けていくということが大事だと思う。

福島原発事故地域のために自分ができること

<今の自分にできること>

・ 知ること

福島原発事故は過去のことではなく、いまでも影響を受け続けている人がたくさんいる。しかし、東京に住む人たちが、福島原発事故のことを思い出したり、気をつけたりするのは、新しく原発が再稼働することになったりした時や、3月11日に大地震のことを思い出したりする時などだけではないだろうか。私もこの授業を取るまではあまり福島のことを考えたりすることはなかった。毎週講義を聞いていて思うのは、まだ全然福島原発事故の影響は終わっていないということ。そして怖いと思うのは、東京にいる多くの人たちがそのことをほとんど忘れてしまうところ。忘れていたら、福島のために何かしようと思うこともないだろう。わたしは、福島のことを知り続けるべきであると思う。

・ 発信すること

福島のことを知って、次に私ができることは、その情報を発信することである。わたしは文系の生徒であるから、わたしの周りもあまり除染方法などの科学的な面について知っている人は少ないと思う。今回の講義を聞いて、なぜセシウムが土壌の表層にトラップされてしまうのかがよくわかった。わたしもこの情報を誰かに伝えようと思う。なぜなら、私自身、セシウムがたまるシステムがわかったことによって、目に見えない放射性物質に抱く恐怖感がかなり減ったからである。夏に、長期間海外の語学学校に通うが、そのときに日本人である私に原発のことを聞いてくる人もいだろう。そうしたら、この授業を通して知ったこと、わかったことをちゃんと伝えたい。

・ 行くこと

残念ながら、9/22~24に行われる福島県での活動には参加できないが、近い将来、ぜひ福島県に行きたいと思う。溝口先生が行われている、農民による除染活動はすごく合理的でいい方法だと思った。ゼネコンなどが大規模に除染する方が合理的なのはと最初は思ったが、農民が自分で、普段自分が耕している土地を除染する方が早くすむと思う。福島県に行ったら、除染活動に参加してみたいと思う。

また、わたしが福島県に行ったら、避難して自分の家を離れている高齢者のひとと、話したいと思う。いま、避難者の自殺が増えているという。その原因の一つは孤独であることだと思う。わたしには老人ホームで暮らす祖母がいる。老人ホームが遠いこともあって、一ヶ月に一回くらいしか行けないし、行っても祖母は認知症なので、会話がすごく弾むわけでもない。しかし、いつもかえるときに、「また来てね」と言ってくれる。私が訪れているときは少しだけでも祖母の寂しさをいやせているのかなと思う。福島で避難を余儀なくされている高齢者の人たちの中にも、孤独なひとは多いのではないかと思う。福島に行ったら、除染活動に参加するだけでなく、そのような高齢者の人たちと色々話すことができれば良いと思う。

< 将来できること >

・ 「福島」を売り込むこと

わたしは将来やりたい仕事のひとつとして、貿易がある。もし貿易関係の仕事をする事になったら、福島県のを海外に売り込みたいと思う。福島県のが海外に売れるということは、日本が福島原発事故を乗り越えつつあることを示すことにもなると思う。先生もおっしゃっていたように、原発事故は長丁場になると思う。だからこそ、私が社会人になってもなにか福島のためになるようなことがどんな職種に就いたとしてもあると思う。この授業が終わっても、福島のことを知り続けたいと思う。

福島の現状とその復興について学び、いま自分にできることは何か

今の自分には特別な技術や影響力はなく、福島の復興について直接関与できることといえば、募金をするというくらいしか思い浮かばない。しかし、この授業で様々なことを学び、将来または間接的に貢献できることはあるのだと感じた。

まず、現在間接的にできることは、誤った情報の拡散に加わらず、さらに誤りであると指摘することである。先生がおっしゃっていたように、**twitter**や**facebook**では誤った情報が簡単に広められてしまう。かつての、マスメディアと一般人という情報の送り手と受け手が二分化されるという構図なら話はまた別である。しかし、一般人も情報を発信し得るように状況は変わってきており、さらに前述のツールでは頭を大して働かせずに情報を百人以上の単位のフォロワーに拡散することさえできる。実際に、私が先日 **twitter** を閲覧した際の出来事であるが、「放射能によって巨大化したオタマジャクシ」というタイトルでオオサンショウウオの写真が回ってきた。思わず笑ったが、反面その程度の内容でさえ何千回もリツイートがされていてぞっとしてしまった。

誤った情報を誤っていると判断できることは大事である。福島についてはこの授業で少しばかり情報の判断能力はついたと思うので、誤った情報が流れてきたらそれを指摘していこうと思う。

次に、将来にかけて今からできることについて述べる。私は法学部に進学し、将来は弁護士になるつもりである。現在法律の勉強をしているのだが、その過程で原発事故によって被害を受けた人々の訴訟についても少し学ぶ機会があった。大規模な原発事故はいままで日本で起こったことはなく、訴訟の仕方は誰も分からなかったらしい。それに、大した収入にもならないであろう。合理的に考えれば、受けるべき仕事ではないかもしれない。しかし、実際に弁護士の方々がたちあがって放射線のことなど初歩の初歩から勉強し始め、ついに提訴できたという。法律的な仕事にだけしがみついていた生活はできるかもしれないが、そうしないで困った人のために働こうという気持ちがあったがゆえに達成できたのだらうと思う。法律は人の生活の土台を規律しているがゆえに、生活のあらゆる側面とかかわりを持つ。また、そもそも憲法は個人を尊重する価値観のもとに人権を保障するものである。実際に仕事についてしまうと多忙ゆえに忘れてしまいやすいかもしれないが、弱者の保護という最も大事なことを常に頭においている弁護士でありたいと思っている。

そのためには、デスクの前での仕事だけでなく、いろいろなことに触れてみることに、実際に現場に赴くことが最も大切なのではないか。大学生のうちから、自分の専門に固執せずに様々なことに興味をもち実際に体験できる行動力を身につけようと思う。

理 I

自分が「出来ること」というのはたくさんある。それは例えば勉強ができるでもいいし、統計ソフトを使えるでもいいし、あるいはこの授業で学んできて放射線に関する知識も人よりある。しかしそれを用いて人に何を施すことが「出来そう」かということ、なかなか思いつかない。

私は能力をつけることには意欲的だが、それを用いて何をしたいのか、何がしたいのかということについてほとんど考えてこなかったような気がする。放射能被害について学んで、それでなにになるのか？ ツイッターで他の人よりも高みの見物をするためなのだろうか？ もっと实际的で、それを用いて例えば福島の農業復興に何か解決策を見いだしたりすることを考えなければならないのかもしれない。

きっと私のような、知識だけを偏重するような人が彼らの言う「机上の発想」的な解決策しか出せないのだろうと思った。机上の発想を脱するには、当然机上から立ち上がって現場に行くしかない。現場の土に立って、そこでどうすべきなのかを考えなければならないと思った。

僕は一貫してこの感想レポート群で「もっと基準値をあげてしまえばいい」と言っていた。明らかに基準値は厳しすぎると思ったし、その厳しい基準値のせいで多くの人が苦しんでいると思った。農作物が売れなかったり、家を失ったり、やたら不安になる人々を生んだのは基準値のせいなのではないかと。だが、一方で基準値を上げさえすれば多くの問題がなきものになると思っていた節もある。考えるのが面倒くさかったから、そんなのは問題ではないと一蹴しようとしてしまっていたのかもしれない。基準値を上げる、という行為も「机上」におけるまやかしにすぎない。しかし基準値を上げるにしろ上げないにしろ、人間が住んだり農作したりするには危険な地域は確実に存在する。そこをどうするかという問題は確実に残るのだから、それをどうするかについてよく考えなければならないはずだった。なぜそれが分からなかったのか、というのはやはり現場を知らなかったからなのかもしれない。

以上の結論をまとめると、自分が今出来ること・すべきことは現場に立つということだ。夏に福島県の避難所で過ごす中学生に学習支援をするボランティアがある。それに参加しようか悩んでいる。本当に悩んでいる。とてもやりたいのだが、能力的に自分に出来るのかを考えると悩ましい気持ちが溢れ出てくる。しかしこれに参加をすれば確実に福島の実状の一端に触れることが出来るはずである。だから、とても参加してみたいと思っている。まだ考え中であるが、もし僕が参加することに決めたのならそれはこの講義のおかげであると言ってもいいだろう。

自分でできることは、やはり福島県の放射能汚染状況や福島第一原発事故について学習したり、現場をみたりそこで話を聞いたりすることだと思います。わたしが直接除染に関係したりすることは、そういう道に進んだりボランティアに参加しない限りおそらく無いと思いますが、自分が勉強をして周りに正しい知識を広めていくことならできると思います。

福島の農業復興に必要なのは、除染もそうですが、消費者の放射能汚染に対する認識を変えることだと思います。いくら除染が完了して、福島県の農家の方々が農業を再開できたとしても、消費者が「福島県の農産品には放射能がたくさんついているから買わないでおこう」という意見を持っていれば出荷された農産物が消費されることはあまりないでしょう。そうすると、せっかく作ったものが売れないので農家の方々はまたやる気を無くされてしまうかもしれません。中には、福島県はとても放射能で汚染されていると考え、そこへ行くことさえためらってしまう人たちもいると思います。これほど怯えているのは、放射能の知識があまりないからだけではなく、どれだけ放射能が減っているかという情報が普段の生活ではあまり入ってこないからだだと思います。13回の講義の中で学んだことの中には、3年前に比べ、空間線量も大分減ってきたということもありました。居住制限区域は依然として存在したままですが、基準を下回ったことで帰ることができるようになった地域もあります。これらのことを周りに知らせていくことで、少しでも放射能に対する恐れや福島県に関連するものへの不信感を減らしていけると信じています。

また、現場を見ることによって、今なにがなされているのかが分かるし、どれだけ除染が進んでいるかも分かると思います。以前、サークルで東北の被災地を巡るツアー(?)に参加したとき、様々なことを学ぶことが出来たことからそれを実感しました。福島県において、農業は結構行われていたことに驚きました。しかし、やはり除染は完全には進んでいなかったため、いろいろな機械を用いて放射能汚染がどれほどかを計測していました。一方で、除染が全く進んでいなかったところもありました。浪江町は人もいませんでした。それでは農業を再開することもできません。まずは福島第一原発からの放射線放出を少なくしていく必要があると思いました。その他にも、実際に被災地へ行くことで初めて知ることも多かったです。

今回のような授業がまたあれば、とって学習しようと思います。

私は溝口先生の講演を聞いて、やはりこういった住民の心情の機微などが関わるような仕事は政府関連の組織のみによる復興支援のみでは難しいと思いました。また、公式の支援だと手続きがあまりに煩雑だとも聞きました。やはり自分は将来文系の仕事に就くものとしてこういったことに留意し、こういった時に融通を効かせる必要がある、と思いました。しかしこういった時には被災地にはカルト団体なども多く出入りする、ということも確かなことではあるのでそういったものへの対策も考えるようにしよう、と思いました。

また、日本のマスコミは海外に福島県が危険ではないことを報道しない、とも聞きました。しかし大学機関やNPOなどはそういった活動を比較的容易に行えると聞きました。なので将来そういったことを海外に向けて発信する際は大学機関やNPOへの支援や協力をしっかりとしよう、と思いました。

そして飯舘村などの住民たちは村が分割されたりしたことで感情的に対立していて事故が長期化している現状ではますます住民の方々との意見調整と共に働くことが大事だと聞かされ、これからも短期的にはなく長期的にボランティアなどに行って地元の方々とつながりを大切にしようと思います。

さらにどんな時でも主役はあくまで住民の方々に我々はあくまで裏方である、ということも聞きました。これに関してはやはり復興支援に意欲的な人でも気づいていないことが多いことだと思いました。なのでこのことをいろいろな人に伝え、私が将来何らかの職業に就いた時もこのことを考えの起点に据えよう、と思いました。

また、住民の方々の福島県への愛着は簡単にわかるようなものではない、ということも改めて分かりました。現地に行かないのではある程度は正しい情報も得られるが大事なことが分からないことが多い、と聞きました。

総じてやはり意味のある支援をしっかりとするには現地に行かないのではだめだと思いました。現地に行くことで住民の方々と信頼関係を築き、長期的に協力していくことが大切だと思います。

また、溝口先生からは大学時代に教わったことがこのような時に活かされる、とも聞きました。

なので今自分ができることは福島県に足を運んで復興に協力したりして住民の方々の心情を十分に察したうえで比較的冷静でいられる第三者としてさまざまな援助や手助けを行い、そしてさらには将来復興に大きく貢献できるように今はしっかり勉学に励むことだと思います。特に私は文系ですが将来こういったことにも対処できるように今のうちに理系の科目も軽視せずにしっかりと学んでいこうと思います。

そして福島県における放射線が本当に安全かどうかなどをデマや巷に流れる話などに惑わされずに判断できるようになっていきたいです。

提出が遅れて誠に申し訳ありませんでした。